ソーシャル・サポートの互惠性が青年の心身の健康に及ぼす影響

中央研究院(台湾) 周玉慧 ・ 広島大学 深田博己

The effects of social support reciprocity on mental and physical health of young adults

Yuh Huey Jou (*Sun Yat-Sen Institute for Social Sciences and Philosophy, Academia Sinica, Nankang, Taipei, Taiwan, China*) and Hiromi Fukada (*Department of Psychology, Faculty of Education, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashihiroshima 739*)

The present study examined the effects that reciprocity of social support has on mental and physical health of young adults from the viewpoint that an individual is both an active and passive support provider as well as receiver. The questionnaire, completed by 505 young adults, included items that measured four kinds of support: requested by and provided to others, and requested and received by them. It also asked about the affects associated with support relationships, in addition to the level of adjustment and mental and physical health. Correlational analyses showed that young adults felt their support relationships were fairly reciprocal. ANOVA and multiple regression indicated that lack of reciprocity was in general associated with negative affects and poor health. Providing more support than receiving lead to dissatisfaction, and receiving more than providing to a feeling of indebtedness. Finally, the data supported the prediction that there was a path from support equity to affective state to mental and physical health.

Key words: social support, reciprocity, equity theory, affect, mental and physical health.

ソーシャル・サポート研究では、個人を受動的なサポートの受け手であると同時に能動的なサポートの送り手として扱う観点の必要性が指摘されている (Acitelli & Antonucci, 1994; Antonucci & Akiyama, 1987; Antonucci & Jackson, 1990; Buunk, Doosje, Jans, & Hopstaken, 1993; 福岡, 1994; 蜂屋, 1990; Jung, 1990; Rook, 1987 など)。しかしながら, Cohen & Wills (1985), Barrera (1986, 1988) などのレビュー論文からも明らかなように, 大多数のサポート (以下 SS と略称する) 研究は, SS の受け手の立場から個人の知覚された SS や実行された SS (受け取った SS) を測定し, これらの SS が彼らの心身の健康に及ぼす影響を検討してきており, 個人が同時に受け手と送り手であるという視点からの研究は必ずしも十分に行われているわけではない。

SS が人々の間で交換される資源であるという社会的交換理論の立場から, Antonucci & Jackson (1990), Buunk et al. (1993), Ingersoll-Dayton & Antonucci (1988), Jung (1990) や Rook (1987) は, SS の互惠性 (reciprocity) の視点を導入することによって, 個人が同時に SS の送り手と受け手であるという問題にアプローチしようとした。SS の互惠性は, 自分が他者から受け取った SS と同じような SS を他者に返すことを意味する。

ところで, 社会的交換理論に属する理論の一つとし

て衡平理論 (equity theory) がある。衡平理論によると, 2 者間の相互作用における一方の側の投入 (input) と成果 (outcome) の比率が他方の側の投入と成果の比率と等しい場合が衡平であり, 公正感が生じるが, それらの比率が等しくない場合は不衡平であり, 不公正感が生じ, 緊張や不満が生じる。こうした 2 者間の投入と成果の比率の均衡・不均衡という衡平理論の考え方を, SS 研究に応用しようと試みる一連の研究 (Buunk et al., 1993; Ingersoll-Dayton & Antonucci, 1988; Jung, 1990 など) がある。これらの研究は, 2 者間の投入と成果の比率の均衡・不均衡という視点を, ある個人が提供する SS 量と受け取る SS 量の均衡・不均衡という視点に置き換えることによって, SS の互惠性の問題を掘り下げている。そこには, 提供する SS の量と受け取る SS の量が一致するときが衡平であり, 望ましい状態であるが, それらが不一致なときは不衡平であり, 望ましくない状態であるという, 基本的な仮定が存在する。投入と成果の比率に関する 2 者間の一致性という相対的均衡性の問題を, 個人の投入と成果の一致性という一種の絶対的均衡性の問題に適用しようとしているという意味において, 上述したような視点の置き換えは, 衡平理論の拡張の限界を超えているという批判を免れ難いが, 本研究では, 個人に焦点を据えた SS の授受という後者の視点の意義を認め, SS 授受の均衡・不均衡の意味で衡

平・不衡平の用語を使用する。

SSの互恵性に関する先行研究を整理したAntonucci & Jackson (1990)は、不均衡の状態には、受け取るSSの量の方が多くて不均衡な場合と、提供するSSの量の方が多くて不均衡な場合とがあり、前者の場合、個人は負債感を覚え、後者の場合、個人の独立性が脅かされて迷惑感を覚える、と指摘している。そして、彼らは、不衡平状態で生じるそうした不快感情が個人の心身の健康に悪影響を及ぼすことを、また、同じ不均衡状態であっても、受け取るSSが多い場合の方がより望ましくないと述べている。La Gaipa (1990)は、提供したSSの方が受け取ったSSよりも多いという過小利得 (underbenefited) 知覚は負担感および欲求不満感を引き起こすのに対して、受け取ったSSの方が提供したSSよりも多いという過剰利得 (overbenefited) 知覚は罪悪感および依存性を引き起こすと指摘した。Buunk et al. (1993)も、過小利得知覚は不公平感および憤慨感を引き起こすが、過剰利得知覚は罪悪感および恥ずかしさを引き起こし、そして、受け取ったSSの量と提供したSSの量が衡平であるときのみ、個人の健康が促進されるが、SSを返す能力がないと個人が知覚すると、個人の援助要求さえも抑制されると論じている。

実際に、提供するSS量と受け取るSS量との不衡平がネガティブな感情を引き起こしたり、個人の心身の健康に悪影響を及ぼしたりすることを報告した先行研究 (Buunk et al., 1993; Ingersoll-Dayton & Antonucci, 1988; Jung, 1990; Rook, 1987 など) がある。例えば、Buunk et al. (1993)は、181人の職業人を対象とし、上司とのSS関係についても、同僚とのSS関係についても、不衡平な場合の方がいろいろ、うつ、困惑などのネガティブな感情が強いと報告した。Rook (1987)は、平均年齢72.47歳のアメリカ人女性120人を対象とし、SSの提供量と受け取る量が不衡平であることが彼女らの孤独感と有意に関連していることを報告した。また、Ingersoll-Dayton & Antonucci (1988)は、718人の中高年者を対象とし、受け取ったSSと提供したSSが衡平であるかどうかはネガティブな感情状態に影響を及ぼさないが、配偶者や友人に対する過剰利得知覚、また自分の子供に対する過小利得知覚はそれぞれネガティブな感情をより多く引き起こす、と報告した。先行研究の結果から、SSの互恵状態 (衡平状態) はまず個人の感情状態に影響を及ぼし、その感情状態はまた個人の健康に影響を及ぼしているように思われる。

また、SSには、必要とするSS、知覚されたSSと実行されたSSの三つの次元が存在することが指摘された (周, 1994)。SSの互恵性による影響を検討した先行研究では、認知レベル (知覚されたSS) の互恵性 (Buunk et al., 1993)、行動レベル (実行された

SS) の互恵性 (Rook, 1987)、および認知レベルと行動レベルの両方の互恵性 (福岡, 1994) を測定したものがあ。しかし、SSを人々の間で交換される資源だとする社会的交換理論から考えると、個人が受け取る可能性のあるSSと同じようなSSを他者に提供する可能性があるという認知レベルの知覚されたSSの互恵性は、実際には行動レベルの実行されたSSの互恵性に基づいた予測あるいは期待である。社会的交換理論の立場に立てば、SSの互恵性は行動レベルでとらえる方がより適切であると思われる。

更に、個人をSSの受け手としてみると、個人がSSを受け取る量のみでなく、個人がSSを求める量も個人の心身の健康に関係していると推測される。例えば、Jou & Fukada (1995)は、受け取ったSSと留学生の適応との間にはポジティブな関係があるが、必要とするSSと留学生の適応の間にはネガティブな関係があると報告した。提供するSSと受け取るSSは行動レベルのSSであるので、意識レベルの必要とするSSを行動レベルの要求するSSと置き換えて考える方が適切であろう。また、個人をSSの送り手とみなすときに、個人のSSの提供量のみでなく、他者から求められたSSの量も個人の心身の健康に何らかの影響を及ぼしているかもしれないと推測できる。こうして、SSの互恵性を検討するときに、従来の研究が示唆してきたSSの提供量と受け取る量の衡平状態を考慮するのみでなく、SSを求める量と求められる量の衡平状態をも検討する必要がある。送り手として求められたSSと受け手として求めたSSを取り上げるということは、従来のSS研究における、能動的送り手、受動的受け手という観念を打ち破るものであり、送り手の受動性、受け手の能動性を認める姿勢を示す。すなわち、個人をSSの能動的かつ受動的な送り手、受動的かつ能動的な受け手としてとらえ直すことによって、SS研究、特にSSの互恵性に関する研究を深めたい。

上述した論議を踏まえて、本研究は、個人を受動的かつ能動的なSSの受け手であると同時に能動的かつ受動的な送り手でもあるという観点から、SSの互恵状態 (衡平状態) が個人の心身の健康に及ぼす影響とそのパスを検討することを目的とする。具体的に使用するSSの指標は、能動的な送り手として提供したSS、受動的な送り手として求められたSS、能動的な受け手として求めたSS、および受動的な受け手として受け取ったSSの4種類である。

なお、SSの互恵状態が心身の健康に及ぼす影響を検討する方法としては、基本的に2通りの方法が存在する。第1の方法は、対象とする個人を取り巻く人々の中から重要な人々を抽出し、当該個人とそれらの人々のひとりひとりとの2者関係を考え、当該個人を中心とする2者間のSSの互恵状態を測定するやり方

である。そして、2者間のSSの互恵状態の累積値と、当該個人の心身の健康との関係を分析する方法である。この方法は、相手を特定するので、SSの互恵状態の測定の精度が高まるという長所はあるが、当該個人を取り巻く人々の人数を限定する場合でも、SSの測定に要する時間および労力はその人数倍になるという短所をもつ。第2の方法は、対象とする個人とその個人を取り巻く人々との間で交わされるSSを全体量・総量として測定し、当該個人とその個人を取り巻く他者全員との間のSSの互恵状態を明らかにするやり方である。そして、全体量・総量としてのSSから見た互恵状態と当該個人の心身の健康との関係を分析する方法である。この方法は、当該個人を中心とする個々の2者関係には目を向けないので、SS測定の精度に問題があるかもしれないが、当該個人とその個人を取り巻く他者全員とのSSの授受を短時間で効率的に測定できるという利点がある。本研究では、既に述べたように4種類のSSを測定するので、被調査者の負担を考えると、第2の方法を採用する方が適切であると考え、第2の方法を使用することとした。

方 法

調査対象者

中国地方の大学、短期大学および専門学校の学生536名を調査対象者とした。そのうち、欠損値などデータに不備があった31名を削除した505名を分析対象者とした。男子139名、女子360名、無回答6名であり、年齢は18歳から25歳 ($M=19.17$, $SD=1.01$) であった。重大なストレッサーに直面している人々に比べると、通常の学生生活を送っている学生は、SSを必要とする程度もそれほど小さくなく、SSの効果もそれほど大きくないと予想される。しかし、健常な学生であっても、SSの恩恵を全く受けることができなければ、健康的な学生生活を営むことは極めて困難であろう。SSがもともと対人関係の中に潜在する、日常性を帯びた支援力であることを考えれば、健常な学生の心身の健康の維持・増進に対するSSのかかわりを検討することの意義が理解できると思われる。

調査時期および手続き

調査時期は1994年10月であった。実施は心理学に関する授業時間の一部を借りて、調査票を配布・回収した。

サポートの測定

SSについては、嶋(1992)、福岡・橋本(1992)、本間・阿部・宇野・堀野(1988)、和田(1992)の使用した尺度を参考にし、心理・情緒・受容的なSS10

項目、道具・手段・物質的なSS10項目、アドバイス・指導に関するSS7項目、情報的なSS5項目、仲間・社交に関するSS3項目、合計35項目のSS尺度を作成し、最近3か月の間でのSS授受について尋ねた。SSの指標としては、①受動的送り手としての求められたSSと②能動的送り手としての提供したSS、③能動的受け手としての求めたSS、④受動的受け手としての受け取ったSS、の4種類を使用した。35項目のそれぞれについて、“たくさん(求められた、与えた、求めた、もらった)”(4点) — “全く(求められなかった、与えなかった、求めなかった、もらわなかった)”(1点)までの4段階で評定させ、SSを求められた程度、提供した程度、求めた程度、受け取った程度の高い段階の反応に高得点を与えるように得点化した。

求められたSS、提供したSS、求めたSS、受け取ったSSの内的整合性を検討するために、 α 係数を算出したところ、それぞれ、.93、.93、.94、.93でかなり高かった。そこで、各指標のSSにおける35項目の得点とを個人の4種類のSS得点とした。

感情状態の測定

Buunk et al. (1993)、福岡(1994)、Lu & Argyle (1992)の研究を参考にし、調査対象者にSSを提供した程度とSSを受け取った程度とを比較させ、恥ずかしさ、申し訳なさ、負担感、欲求不満感の四つの感情状態を評定させた。各項目に対して、“全くあてはまらない”(1点) — “よくあてはまる”(4点)までの4段階で評定させ、感情の強い段階の反応に高得点を与えるように得点化した。4項目間には.14—.47 ($p<.01$)の正の相関関係が見られ、特に、恥ずかしさと申し訳なさとの間 ($r=.47$)、負担感と欲求不満感との間 ($r=.43$)の相関関係が強かった。そこで、恥ずかしさと申し訳なさの得点とを“負債感”得点とし、負担感と欲求不満感の得点とを“負担感”得点とした。

不適応度の測定

不適応度についてはBaker & Siryk (1984)、Baker, McNeil, & Siryk (1985)、上原(1988)の使用した適応尺度を参考にし、32項目の適応尺度を作成した。不適応状態を示す各項目に対して、“全くあてはまらない”(1点) — “よくあてはまる”(4点)までの4段階で評定させ、適応度の低い段階の反応に高得点を与えるように得点化した。適応尺度の内的整合性を確認するために、 α 係数を算出したところ、 α 係数はかなり高く(.88)、尺度の内的整合性が証明された。そこで、32項目の得点とを個人の不適応得点とした。

Table 1
各変数の得点および変数間の相関関係

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	M (SD)
1. 求められたサポート	—								76.14(15.98)
2. 提供したサポート	.89***	—							76.65(16.13)
3. 求めたサポート	.73***	.70***	—						76.89(17.65)
4. 受け取ったサポート	.76***	.76***	.87***	—					79.68(17.47)
5. 負債感	.08	.03	.13**	.13**	—				3.95(1.41)
6. 負担感	.06	.01	.07	-.03	.33***	—			3.14(1.32)
7. 不適応度	-.05	-.09*	.01	-.07	.27***	.45***	—		62.52(13.21)
8. 精神的自覚症状	.06	.03	.13**	.06	.29***	.47***	.77***	—	29.35(8.68)
9. 身体的自覚症状	.14**	.14**	.12**	.13**	.20***	.28***	.52***	.62***	29.39(9.03)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

精神的自覚症状および身体的自覚症状の測定

精神的自覚症状および身体的自覚症状については、KMI (Kyudai Medical Index) から精神的自覚症状 16 項目、身体的自覚症状 18 項目を選び出し、一部の表現を修正して使用した。各精神的・身体的自覚症状項目に対して、“全くあてはまらない”(1点) — “よくあてはまる”(4点) までの 4 段階で評定させ、自覚症状の高い段階の反応に高得点を与えるように得点化した。精神的自覚症状尺度および身体的自覚症状尺度の内的整合性を検討するために、 α 係数を算出したところ、 α 係数はかなり高く (ともに .89)、尺度の内的整合性が証明された。そこで、精神的自覚症状における 16 項目の得点と身体的自覚症状における 18 項目の得点とを、それぞれ個人の精神的自覚症状得点と身体的自覚症状得点とした。

結 果

相関分析

各変数の平均と標準偏差を Table 1 に示した。変数間の関係を検討するために、相関分析を行い、その結果も Table 1 に示した。

4 種類の SS 間の関係については、求められた SS と提供した SS との間に、あるいは求めた SS と受け取った SS の間に極めて高い正の相関関係が見られ、求められた程度に応じて SS を提供し、求めた程度に応じて SS を受け取っていることがわかった。また、求められた SS と求めた SS との間に、あるいは提供した SS と受け取った SS との間に非常に高い正の相関関係が見られ、青年の SS のやりとりはかなり互恵的な状態にあることが示された。なお、4 種類の SS の指標間の相関関係はすべて高く、これらの SS は相互に独立していないことも示された。

4 種類の SS と負債感などの変数との間の相関関係

はあまり顕著でなく、有意な相関関係が見られたところについてもその相関係数は小さかった。4 種類の SS は負債感などの変数にあまり影響を与えていないことが示された。

負債感や負担感と不適応度や精神的自覚症状あるいは身体的自覚症状との間に有意な正の相関関係が存在し、負債感や負担感が強いほど、不適応度が増し、精神的自覚症状あるいは身体的自覚症状が大きくなることが示された。なお、不適応度、精神的自覚症状、身体的自覚症状の 3 変数間にもかなり強い正の相関関係が示された。

サポートの衡平状態による影響

SS の衡平状態が個人の負債感などの変数に及ぼす影響を検討するため、提供した SS と受け取った SS との差の得点、あるいは求められた SS と求めた SS との差の得点に基づき、対象者を第 1—第 5 の 5 群に分類した。第 2 群と第 4 群を除いて、L 群 (第 1 群: 受け取った SS の方が提供した SS よりも多い群、あるいは求めた SS の方が求められた SS よりも多い群)、M 群 (第 3 群: 提供した SS と受け取った SS がほぼ同量である群、あるいは求められた SS と求めた SS がほぼ同量である群)、H 群 (第 5 群: 提供した SS の方が受け取った SS よりも多い群、あるいは求められた SS の方が求めた SS よりも多い群) を使用して、負債感などの得点に関する 1 要因 3 水準の分散分析を行った。L、M、H の 3 群における負債感などの得点の平均を Table 2 に示した。なお、下位検定としての多重比較は Tukey 法で行い、有意水準は 5% に設定した。

提供した SS と受け取った SS との差に関する L、M、H の 3 群間で、負債感得点 ($F(2, 285) = 4.98, p < .01$)、精神的自覚症状得点 ($F(2, 285) = 5.87, p < .01$)、身体的自覚症状得点 ($F(2, 285) = 3.31, p < .05$) に有意差が認められた。下位検定の結果、H 群より

Table 2
サポートの差に関する3群による各変数の平均

		N	負債感	負担感	不適応度	精神的自覚症状	身体的自覚症状
求められたサポート	L 群	98	4.26(1.47)	3.31(1.37)	65.74(14.26)	32.32(10.46)	30.58(9.88)
と求めたサポート	M 群	105	3.71(1.34)	2.93(1.07)	59.49(11.71)	27.38(7.15)	27.20(7.71)
との差	H 群	104	4.03(1.41)	3.42(1.62)	63.23(13.81)	29.96(8.92)	30.09(9.71)
提供したサポートと	L 群	101	4.38(1.50)	3.18(1.39)	64.33(12.96)	31.41(9.13)	30.69(9.55)
受け取ったサポート	M 群	89	3.92(1.46)	2.97(1.29)	59.76(10.87)	27.03(7.40)	27.53(7.32)
との差	H 群	98	3.72(1.52)	3.43(1.53)	62.51(14.71)	29.52(9.56)	30.05(9.37)

()内の数値はSD

Table 3
重回帰分析の結果(1)

説明変数	基準変数	負債感	負担感	不適応度	精神的自覚症状	身体的自覚症状
提供と被提供		(.02***)	(.01*)	(.22***)	(.25***)	(.10***)
の差の絶対値		.15***	.10*	.01	.08*	.08
負債感				.13**	.14***	.11*
負担感				.41***	.42***	.23***
被要求と要求		(.02***)	(.03***)	(.22***)	(.26***)	(.09***)
の差の絶対値		.16***	.16***	.06	.12**	.04
負債感				.12**	.13**	.12**
負担感				.40***	.41***	.23***

表内と()内の数値はそれぞれ β 係数と R^2 係数

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

もL群の方が負債感得点が有意に高く、M群よりもL群の方が精神的自覚症状得点や身体的自覚症状得点が有意に高かった。なお、負担感得点($F(2, 285) = 2.93, p < .1$)、不適応得点($F(2, 285) = 2.53, p < .1$)にも傾向差が見られた。

求められたSSと求めたSSとの差に関するL, M, Hの3群間で、負債感得点($F(2, 304) = 3.80, p < .05$)、負担感得点($F(2, 304) = 3.65, p < .05$)、不適応得点($F(2, 304) = 5.73, p < .01$)、精神的自覚症状得点($F(2, 304) = 7.80, p < .001$)、身体的自覚症状得点($F(2, 304) = 4.12, p < .05$)のすべてに有意差が認められた。下位検定の結果、M群よりもL群の方が負債感得点、不適応得点、精神的自覚症状得点および身体的自覚症状得点が有意に高く、M群よりもH群の方が負担感得点が有意に高かった。

パス解析

提供したSSと受け取ったSSとの差の絶対値あるいは求められたSSと求めたSSとの差の絶対値(絶対値が小さくなるほど平衡であることを示す)を使用

して、負債感得点、負担感得点、不適応得点、精神的自覚症状得点、身体的自覚症状得点をそれぞれ基準変数とする重回帰分析を行った(Table 3)。その結果に基づき、標準偏回帰係数が5%水準で有意であったパスを示したものがFigure 1のパスダイアグラムである。

提供したSSと受け取ったSSとの差の絶対値は、負債感や負担感に対して、正の有意なパスを示しており、提供したSSと受け取ったSSが平衡でないほど、負債感や負担感が多く引き起こされる。不適応度、精神的自覚症状、身体的自覚症状のいずれに対しても、負債感や負担感の両方から正の有意なパス係数が見られ、負債感や負担感が強いほど、心身の健康が悪化している。その上、提供したSSと受け取ったSSとの差の絶対値も精神的自覚症状に正の有意なパスを示している。なお、求められたSSと求めたSSとの差の絶対値の分析からも、非常によく類似したパス図式が得られたので、図を省略した。

更に、過小利得と過剰利得によってパスがどのように異なるのかを明らかにするため、提供したSSの方

Table 4
重回帰分析の結果(2)

説明変数 \ 基準変数	負債感	負担感	不適応度	精神的自覚症状	身体的自覚症状
過小利得の場合：					
提供と被提供の差	(.01)	(.04**)	(.18***)	(.22***)	(.09**)
負債感	.08	.20**	-.08	-.04	.02
負担感			.11	.12	.09
			.39***	.43***	.26**
過剰利得の場合：					
提供と被提供の差	(.03**)	(.004)	(.26***)	(.29***)	(.10***)
負債感	.17**	.06	.05	.16**	.16**
負担感			.14*	.13*	.11
			.44***	.43***	.20**

表内と()内の数値はそれぞれ β 係数と R^2 係数*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

が受け取った SS よりも多いという過小利得群 ($n=175$) および受け取った SS の方が提供した SS よりも多いという過剰利得群 ($n=286$) に分けて、それぞれの群別に提供した SS と受け取った SS の差の絶対値を使用して、負債感得点、負担感得点、不適応得点あるいは精神的自覚症状、身体的自覚症状得点をそれぞれ基準変数とする重回帰分析によって検討した。

Table 4 の結果に基づき、標準偏回帰係数が 5% 水準で有意であったパスを示したものが Figure 2 のパスダイアグラムである。Figure 2 を見れば、過小利得群と過剰利得群の両群のパス図式はかなり異なることがわかる。

過小利得群では、提供した SS と受け取った SS の差は負担感のみに対して正の有意なパスを示し、また

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 1. パスダイアグラム(1).

過小利得の場合

過剰利得の場合

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 2. パスダイアグラム(2).

負担感是不適応度，精神的自覚症状，身体的自覚症状のいずれに対しても正の有意なパスを示している。それに対して，負債感はその変数とも関連をもたないことが示された。

過剰利得群では，提供した SS と受け取った SS の差は負債感，精神的自覚症状，身体的自覚症状に対して正の有意なパスを示し，また負債感是不適応度や精神的自覚症状に対して正の有意なパスを示している。負担感是不適応度，精神的自覚症状，身体的自覚症状に対して正の有意なパスを示した。

考 察

本研究では，SS の互恵状態（衡平状態）が個人の心身の健康に及ぼす影響を検討することを目的とした。第 1 に，提供した SS と受け取った SS の間に非常に高い相関関係が存在していることは，Acitelli & Antonucci (1994) の結果と一致しており，青年が周囲の人たちから受け取った SS と同量の SS を周囲の人たちに返しているという互恵的な SS 関係をもっていることがわかった。その上，求められた SS と求めた SS の間にも非常に高い相関関係が見られ，青年と周囲の人たちとの SS 関係が互恵的であることが重ねて実証された。第 2 に，送り手である場合の求められた SS と提供した SS あるいは受け手である場合の求めた SS と受け取った SS の間に極めて高い相関関係が認められ，求められたら提供し，求めて受け取る状態がうかがえ，青年と周囲の人たちとの SS 関係は非常に密接であると言える。以上の二つの結果から，個人は実際に SS の能動的かつ受動的な送り手であると同時に，受動的かつ能動的な受け手であるという本研究の考え方が支持された。しかし，これら 4 種類の SS 指標間の相関関係が非常に高く，相互に独立していなかった点は，周囲の他者全員との SS の授受の側面としての 4 種類の SS を，対象者が明確に区別し，自己報告することが困難であるという，SS 測定上の問題が存在していた可能性が残される。

本研究で使用した 4 種類の SS は，単独では負債感や負担感とも，不適応度，精神的自覚症状および身体的自覚症状ともあまり関連性がなく，先行研究の結果と異なっている。先行研究では，提供した SS の量が多ければ負担感が強くなり (Lu & Argyle, 1992)，求めた SS の量が多ければ心身の健康が悪くなり (Brown, Brady, & Lent, 1987)，受け取った SS の量が多ければ心身の健康が良くなる (Aneshensel & Frerichs, 1982) または悪くなる (Cohen & Hoberman, 1983) という結果が報告されてきた。SS と負債感などの変数との間の関連性があまりなかった理由として，次の二つが考えられる。一つは，これらの SS のやりとりは青年にとって既に日常生活の一部分になってしまい，SS の効果が顕著でなくなっ

まったという可能性である。他の一つは，青年の経験する生活ストレスがあまり存在しないという可能性である。ストレス緩衝モデルは，ストレスが存在するときには SS はそれを緩衝する機能をもつが，ストレスが存在しないときには SS は心身の健康に直接の効果をもたらさないと仮定する。もし青年があまりストレスに直面していないとすれば，SS は受け手の感情や適応に影響を及ぼさないと解釈できるが，青年の経験する生活ストレスが確かに少ないかどうかは更なる確認が必要とされる。

ところで，提供した SS と受け取った SS が衡平状態であるのは望ましい状態であり，衡平状態でないことは望ましくない状態であるという衡平理論の仮定，ないし過小利得よりも過剰利得の方がより望ましくないという Antonucci & Jackson (1990) の指摘に関して，本研究では提供した SS と受け取った SS との差に関する L, M, H の 3 群のみでなく，求められた SS と求めた SS との差に関する L, M, H の 3 群によって検討したし，いくつかの重回帰分析によっても検討した。

まず，SS 間の差に関する L, M, H の 3 群における負債感などの変数の平均値を見ると，負債感の一部と負担感を除けば，いずれも L 群 > H 群 > M 群の順になっている。負担感については，H 群 > L 群 > M 群の順になっている。更に分散分析を行った結果，顕著でないものの，他の 2 群よりも求められた SS と求めた SS がほぼ同量である M 群の方が，あるいは提供した SS と受け取った SS がほぼ同量である M 群の方が感情状態が良好で，不適応度，精神的自覚症状や身体的自覚症状が少なく，衡平理論の仮定と一致した結果が得られた。また，衡平状態でない他の 2 群の間には，負債感などの変数の得点の差はあまり見られなかったが，提供した SS の方が多い群よりも受け取った SS の方が多い群の方が負債感を多く感じているという結果は，Antonucci & Jackson (1990) の指摘を支持したし，過小利得知覚は負担感などを，過剰利得知覚は罪悪感などを引き起こすという La Gaipa (1990) や Buunk et al. (1993) の仮定を一部支持した。次に，Figure 1 と Figure 2 のパス図式の結果は，衡平理論の仮定を一層明白に証明した。Figure 1 から，衡平でない状態よりも衡平である状態の方が不快感情が低く，望ましい状態であるという仮定が支持され，Figure 2 から過小利得は負担感を，過剰利得は負債感を引き起こすという仮定が支持された。

ここでは，SS 間の差に関する L, M, H の 3 群の比較および重回帰分析から得られた示唆は以下の 3 点にまとめることができる。第 1 に，SS の互恵性に関する従来の研究が取り上げなかった求められた SS と求めた SS の重要性が証明された。SS を提供することと受け取ることの衡平状態だけでなく，SS を求められ

ることと求めることの衡平状態も実際に青年の心身の健康に対して重要な役割を果たしている。第2に、SSの提供や被提供のレベルであるか、被要求や要求のレベルであるかにかかわらず、衡平状態であるかどうかは青年の心身の健康に影響を及ぼしており、衡平状態の重要性が確認された。第3に、先行研究で示唆された過小利得が負担感を、過剰利得が負債感を引き起こすという現象が本研究でも出現していた。

SSから心身の健康までのパス図式を検討した結果から、以下のいくつかのことが明らかとなった。まず、提供と被提供との衡平状態と同様なパス図式は被要求と要求との衡平状態にも見られている。次に、SSの衡平状態は青年の不快感情に直接的に影響を及ぼしている。そして、いずれのSSの衡平状態も青年の不適応度あるいは身体的自覚症状に直接的に影響を及ぼさなかった。その代わり、負債感と負担感の両方は、青年の不適応度、精神的自覚症状あるいは身体的自覚症状にすべての正の影響を及ぼしており、負債感や負担感が強ければ強いほど、青年の心身の健康が悪化していることが示された。つまり、SSの衡平状態は負債感や負担感を規定し、そして負債感や負担感は心身の健康を規定する、というパスがうかがわれ、SSの衡平状態は負債感や負担感を媒介にして間接的に心身の健康を規定することが解明された。

このように、本研究では、提供したSSと受け取ったSSのみでなく、求められたSSと求めたSSを取り上げることによって、SSの互恵状態（衡平状態）が青年の心身の健康に及ぼす影響を明らかにし、SSの衡平状態→感情状態→心身の健康というパスを証明した。

本研究では、ある個人と周囲の人々とのSS関係を全体量・総量から測定した。しかし、一口にある個人を取り巻く人々とのSSの関係といっても、取り巻く人々の種類やSSの内容は多様である。今後、どの相手とのSSの互恵状態（衡平状態）が、かつ、どの相手とのどのようなSSの互恵状態（衡平状態）が個人の心身の健康にどのような影響を及ぼすかを検討する必要性がある。

なお、SSと心身の健康との関係を検討するにあたって、求めたSSと受け取ったSSのギャップや、求められたSSと提供したSSのギャップに注目し、これらのギャップが心身の健康に及ぼす影響を検討することも興味深い問題である。また、SSを受け取ることが自尊心を脅かし、社会的弱者とみなされるような状況では、SSが心身の健康に対してネガティブな影響をもたらす可能性が考えられるので、自尊心への脅威あるいは社会的評価という視点からSSの効果を検討することも必要であろう。

引用文献

- Acitelli, L. K., & Antonucci, T. C. 1994 Gender differences in the link between marital support and satisfaction in older couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 688-698.
- Aneshensel, C. S., & Frerichs, R. R. 1982 Stress, support, and depression: A longitudinal causal model. *Journal of Community Psychology*, **10**, 363-376.
- Antonucci, T. C., & Akiyama, H. 1987 Social networks in adult life and a preliminary examination of the convoy model. *Journal of Gerontology*, **42**, 519-527.
- Antonucci, T. C., & Jackson, J. S. 1990 The role of reciprocity in social support. In B. R. Sarason, I. G. Sarason & G. R. Pierce (Eds.), *Social support: An interaction view*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 173-198.
- Baker, R. W., McNeil, O. V., & Siryk, B. 1985 Expectation and reality in freshman adjustment to college. *Journal of Counseling Psychology*, **32**, 94-103.
- Baker, R. W., & Siryk, B. 1984 Measuring adjustment to college. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 179-189.
- Barrera, M., Jr. 1986 Distinction between social support concepts, measure, and models. *American Journal of Community Psychology*, **14**, 413-445.
- Barrera, M., Jr. 1988 Models of social support and life stress: Beyond the buffering hypothesis. In L. H. Cohen (Ed.), *Life events and psychological functioning: Theoretical and methodological issues*. Newberry, CA: Sage. Pp.211-236.
- Brown, S. D., Brady, T., & Lent, R. W. 1987 Perceived social support among college students: Three studies of the psychometric characteristics and counseling uses of the social support inventory. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 337-354.
- Buunk, B. P., Doosje, B. J., Jans, L. G. J. M., & Hopstaken, L. E. M. 1993 Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 801-811.
- Cohen, S., & Hoberman, H. M. 1983 Positive events and social supports as buffers of life change stress. *Journal of Applied Social Psychology*, **13**, 99-125.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Social support, stress and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.
- 福岡欣治 1994 友人関係におけるソーシャル・サポートの効果——受け手かつ送り手としての個人——日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 410-411.
- 福岡欣治・橋本 幸 1992 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャルサポートの測定 健康心理

- 学研究, **5**, 32-39.
- 蜂屋良彦 1990 ソーシャル・サポートと適応 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 54-55.
- 本間道子・阿部洋子・宇野儀子・堀野 緑 1988 ソーシャル・サポート尺度の日本語版の試み：予備的調査(I) 日本女子大学紀要(文学部), **38**, 83-98.
- Ingersoll-Dayton, B., & Antonucci, T. C. 1988 Reciprocal and nonreciprocal social support: Contrasting sides of intimate relationships. *Journal of Gerontology*, **43**, S65-73.
- 周 玉慧 1994 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元——必要とするサポート, 知覚されたサポート, 実行されたサポートの間の関係—— 社会心理学研究, **9**, 105-113.
- Jou, Y. H., & Fukada, H. 1995 Effects of social support on adjustment of Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, **135**, 39-47.
- Jung, J. 1990 The role of reciprocity in social support. *Basic & Applied Social Psychology*, **11**, 243-253.
- La Gaipa, J. J. 1990 The negative effects of informal support. In S. Duck & R. Silver (Eds.), *Personal relationships and social support*. Newbury Park, CA: Sage. Pp. 122-139.
- Lu, L., & Argyle, M. 1992 Receiving and giving support: Effects on relationships and well-being. *Counseling Psychology Quarterly*, **5**, 123-133.
- Rook, K. S. 1987 Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 145-154.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 上原麻子 1988 留学生の異文化適応 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育(編) 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究 広島大学教育学部 Pp. 111-124.
- 和田 実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャル・サポートの影響 教育心理学研究, **40**, 386-393.

——1995. 4. 10 受稿, 1995. 9. 9 受理——